

山中哲學

泉鏡花作

一

煤くすびた黒くろくなつた店前みせさきの柱はしらには、緋絨ひせどしの鎧よろひのやうに、眞赤まっかな唐たうがらしの束たばにして編あんだのを懸かけてある。箄ざるの中なかには薬くすりの箆たんすにありさうな、干ひからびた棗なつめが一掴ひとつかみ、黒くろくなつた熟柿じゆくしがごつ／＼して居ゐる。藁わら根ねの低ひくい軒下のきしたに吊つるした山駕籠やまかこに掴つかみ込こんである藁わらの中なかから、すくまつて圓まるくなつた鷄にはとりが二三羽ば、目白めじろあ押しになつて頬つらを出だして、自在竹じざいだけで引ひかけた鐵鍋てつねかから白しろい湯氣ゆげがむく／＼と立騰たちのぼるのを、くるツとした眼めで、きよろりと見みながら、思おもひ出だしたやうに羽はばたきをすする。ばツさりといふ音おとが時聞とききこえる。かすがの峠たつげの冬ふゆの日は寂然ひっそりして風かぜも吹ふかない。

件くだんの鍋なべの下したは爐ろがあるのでなく、一枚板いちまいいたの長ながいの竹たけで脚あしをつけた腰こしかけのやうなもので、其それを三角さんかく形なりに三ツならべて据すゑてある。其その三角形かくけいの腰掛こしかけで劃くぎつた一座いちざの土間どまへ直たうちに櫓ぼたを投なげて火ひを焚たいて、旅人たびと

に足を突込ませるのが重なり／＼して、灰が堆くなつて、宛然圍爐裡に出来て居るので。

大方また人參と蒟蒻を煮て居るのであらう。鍋は掛け棄にして、客がないから、爺さんか、婆さんか、この休茶屋のあるじといふものが、寒いので店へも出ず、納戸の炬燵に居すくまつてござる。南天のやうなものだの、馬蘭のやうなものだの、殊勝にもあしらつた、この茶屋の小庭一ツの外は、直に崖の樹の梢の枝を組違へた千仞の谷である。

越前武生から三里十町、かすがの村から手を立つたやうな急坂、昇天する龍のやうに蜿り上つて麓から十八町、たゞし武生からずつと爪先上りの道で、此坂から忽ち打つかるやうに峻しくなる。

上り盡すと休茶屋から斜に遠く隔つて隧道が一つある。三十五七間もあらう。別に名はないので、唯、かすがの、隧道といふのだけれど、土地のものは、理は分らない。まんぶ、萬夫と號するので、或はこの絶難の峠に隧道を抜いた大工事に人夫が、萬とで

もいふのか知れぬ。

この隧道を抜けるとまた坂になる。十二層といふ谷間の寒村まで二里半の下り、それからまた十六町の上りで大良に着くと、あとは海に臨んだ山腹の崖道六里一なだれの下り坂で、まつしぐらに敦賀金ヶ崎に着するので、この坂も、山も、谷も、峠も、武生も、敦賀も、福井も、福井も、遙に加賀、越中、能登から、飛騨、越後へかけて、たゞ一面の雪である。

今朝から小畝に歇んで居たのが今またちら／＼と降り出して、堆い雪のある上へ、見る／＼一寸積るので、何處の峠からこぼれて来たか、休茶屋の庭に――雪をかぶつて水も見えない――手水鉢の下にあつた、一片の紅の木の葉もかくれてしまつた。風も添ひ、横なぐりに粉雪を吹込んで、土間も薄りと白くなる。駕籠の窓へもあてるので、やゝ怒りを帯びた鶏の顔は引込んでしまつた。また羽ばたきをする、ばツさりといふ。

恰も其時、空谷の聲音、隧道の眞中あたりに、唐

銅を鳴らすやうな聲がして、（ほッ）（おッ）と響き出したが、踏違へる多人数の蹠音も手に取るやうにどん／＼と聞えて来る。ト納戸の方から白髪を小さく結つた。五十ばかりの脊の低い皺だらけな瘦枯れた婆さんが、なまいだ／＼／＼と口叱言のやうに咳きながら、のそりと出て来た。

出ると、のひ上つて、雪に埋れた向側の家の、ちやうど其屋根の上あたりの處に、徑八尺ばかり、眞黒になつて高い處に遠く見える。隧道の口を眺めたが、腰をのして、てく／＼と土間へ下りて、

「どツこい。」といふ掛聲で、件の腰掛を踏跨ぐと、火は消えかゝつて灰が白くなり、木の葉の生枯なのが半分ばかり燃え残つて居た。婆さんは足を踏開いて少し前屈みになり、自在竹を片手で取つて向うへ押すと、大い鐵鍋が一ゆり揺つた、其手で杖にするばかり丈の長い、鐵の大火箸をぐいと取つて、

「突拍子もねえ、降ることわ／＼。」

と咳いて、また隧道の方を見た。ワツ／＼と響いた中空の人聲がばツたり留んで、山一面に鶴の毛を筆つて、しと／＼と重さうな雪の降りしきるなかへ、

ばら／＼と黒^{くろ}くなつて、八九人^{にん}の人^{ひと}が出^でた。

皆一揃の扮装は、股引向はぎ、草鞋がけで、風を受ける憂があるから、前へまはして合羽を被た、向滕へ雪を浴びて、眉毛にも、頭髪にも雪片を被りながら、筵で織つた肩當して、一人一人、二三十貫もあらうといふ荷を背負つて居る。會社の運送荷物で、冬日は敦賀から、海上、船が利かないので、三國、福井、乃至、加賀、越中地方へ行くのを陸で山越に運搬する。渠等は宿次の荷擔である。

一條道の雪め中を一行にならんで、互に矢聲をかけながら、大呼吸の汗みどろで、流をさかのぼるやうに推して来たが、あたりに飛々の休茶屋の、彼方へ二人、此方へ三人、おもひ／＼に列をぬけて、あとに残つたのがどや／＼と此婆さんの茶店へ入つた。

敷居を跨ぐと、はつといふ呼吸をついて、一同が草鞋にかぶさつた雪を踏落し、顛巻を取つて肩の雪を拂ふのもあれば、顔の汗を拭ふのもあり、仰向いて涙を啜るのもある。

「やあ、ようござつた。」と婆さんは早速に聲を懸ける。

「あゝ、やれ／＼。」と三人が三人、同一やうなことをいつて、前後に腰を掛けた。

「いかいこと降ることつた、なあ婆さん。」

「御大儀様ぢや、はい、なか／＼止みさうにもござらぬ。」

「や、やも此様子で積つたら、時の間に山留ぢやらうて、なあ、」と一人を見返る。

「まづ、何ぢやの、四五日経たぬでは、あとの組は出て来まいかい。」と突出して手を焙る。婆さんは眉を顰めて、

「それでは多目逢はれましねえか。」

「然うよ。」と茶釜の茶を汲み出しながら一人がいった。

「へッぼこな若い奴等、十二層まで此方人等と一緒に来たのでせえ、峠の雪を見て彼處で居竦んでしまやあがつた、一步も踏出し得ない、此方は何の、といふ元氣でやつて来たが、何うしてなか／＼なこつた、近來にねえよ、此方人等も武生で此荷物を下したら逗留だ。やもう、ほつとした、あてこともね

え。
「

「あゝ、こいつを卸してゆつくりと欠伸がしてえな。
「

「卸してゆつくりと休まつしやいまし。」と婆さんは火箸で枯枝を交ぜ返すと、ばつと灰が立つたのを、一人が手拭でおさへながら、

「うんにや卸して休むとせえ、もう一足も行けるのぢやあねえ。これから見ると潜水夫といふ奴の方が増だせなあ。何のそれ磐石を抱いて淵へとやらだ
が、重量をつけて沈むのだから仔細はなからう。分のないこつたい。此方人は重荷を背負つて山へ上るのだから堪らねえ。」

「そこでよ。」とまたいひかゝる處へ、納戸から一人手探りで、白い眼で天井を仰ぎながら出て来た盲人があるので、いひ合せたやうに、黙つて、皆が見た。

肩のしよぼけた、顔色の蒼い、白痘痕で、面長な、五分刈の伸びた瘦せた、盲人で、こざつぱりした綿入の上へ黒のけんちう、紋なしの羽織を着て、小倉の帯を占めたのが、よぼ／＼と出て来ると、早や土

間へ足を下した。ちやうど草鞋が片寄せてあるのを
猶豫はす直に取つて片足をあてがつたから、荷擔夫
どもは驚いた。然るに、婆さんは心得たもので、

「それでは發足つしやるかの。」と、ちと身體を
ずらしたばかり、楯にあたつたまゝ落着いた風で聲
をかける。絶えず仰向いて居るのが軽くうつむいて、
「はい、お世話になりました。」と手早く草鞋
を結んで兩足を揃へた。盲人は悠として襟を合せる。

手荷物も何にもない、小包一個持つては居らず、此雪に盲人の單身で、然も莫座も着ず、合羽も着ず、今草鞋を穿いて仕舞ふと、蝙蝠傘を一本杖にして、其まゝ身を起さうとするのを見て、荷擔夫の一人、堪へかねて聲を掛けた。

「や、按摩さん、お前は、」

「何處へ發つて行かうといふのだ。」と他の人は婆さんにいつた。

盲人は別に答へなかつたが、婆さんは頷いて、

「何ぢや、大良まで行かつしやるのぢや。」

「え、え、大良へ行くえ。かう、途方もねえ、此雪ぢやお前氣の利いた奴は獣でも虚かり歩行かねえぜ。」

「いきなり氷になつちまはあ。」

「今、これ、お前が出かけた日にや、此方人等の歸る時分にや、かすがの峠に座頭の亡念が出るといふ風説をすらあ。」

「いやまた、其時はお目に懸りますかい。」

盲人は聞いてニヤ／＼と笑つたばかり、氣に懸け

た様子もない。

荷擔夫は言ひ加へて、

「そりや何、お前、盲人で川を渡るのもあるから、

斷つて峠を越せねえといふ次第もなからうけれど、

莫蔭一ツ着ねえでお前、此雪に何うするもんだの。」

「難有う存じます。」とばかりいつたが、落着い

て、立上つて、綿入の裾を掴み上げると、生白い瘦

せた足が出る。しよた／＼とだらしない風、杖を

取つてしよんぼりとイんだ。

「よう、これ其風で行かれるもんか。」

「なに、いゝえ、」と、いひざまに振返つて、顔を

傾けて、

「婆さん、お世話でした。」

「ござらつしやるかの。」づか／＼と擔下へ出

ると、鶏が羽ばたきたらう、駕籠にばつさりと音

がしたので、仰いで見た。額へばら／＼と雪がか

つた。盲人は立停つて考へたが、

「小降ぢや。」といつて淋しく笑つた。

「おゝ、小降になつた。」と婆さんは首途を祝す

るが如く勢よくいふ。

盲人は蝙蝠傘を、さゝず脇挟んで、杖を突立てたが、敷居を跨いで峠へ出た。

「ふむ。」と三人は嘲るやうに呟いたが、呆れた顔で見送ると、盲人は隧道の方を指してとぼ／＼とあるいて行く。雪は小歇んで、風が凪ぎた。綿に包まれたやうな山の巔が波頭のやうになつて、はつきり見える。向の茶店に火を焚くのであらう。青い煙が一團、火の形をして眞白な戸外へ出た。

撫肩の悄乎した、黒羽織に紋の無い、首の細い盲人の首垂れた其後姿は、淋しく細道を向うへ遙になつたが、終に雪の下になつて見えなくなつた。

隧道の巨なる黒い口は、パクリとして天の一方にあいて居る。

「命知らずめ。」

「様あ見るよ、今にまた。しかし可哀相に。」

「いや婆さん、お前といふものも、また何だツて見放してたゝしたのだ。」

「何處のものだの。」口々に荷擔夫は問ひ懸ける。

婆さんは幾度も頷いて、

「そりやも、いはねえでものこんでござらあ。昨夜内に泊らつしやつて、翌日は大良へ發つといはつしやるの。雪はふるなり、お前方のいはつしやるよ、もつと／＼此の愚痴つばい婆々の口で、いやになるはど留めましたが、何の雪も合羽もない、袖のあるものは樹の枝に引かゝる道理ぢや、裸身で轉り落ちてなりと、行く處へ行かいはと、何かハヤ一心のことがあると見えるもの。佛様がござらつしやる。それまでに思ふものを、何か知らぬが棄てさつしやるまい。お助けなされうと思つたで、快くたゝせましたが、なんまいだ／＼。」「と、口の中で念佛を唱へたまゝ、婆さんは黙つてしまつた。

「いや、裸身で轉げ落ちるは豪いな、何うだ、やい。」

「むゝ、其氣で出懸ける。」

「どれ、」と一齊に背負つた荷をやり直した。手に／＼顛巻を扱きながら、

「や、婆さま。」

「いじやござれだ。」

「どつこいしよ。」と呼吸を入れて皆立つた。あ
とには藁屑が散らばつて、背の荷物から落した雪が

爐の火で溶けたので、斑々として土間を濡した。

婆さんは彼の大火箸で、樹の枝、枯葉を四隅から
灰の中へ掻き寄せながら、うつむいて眼を瞑つて、

「なんまいだ、なんまいだ、なんまいだ。」とぶ
つ／＼唱へる。

四

「先生、荷擔夫がす。道を除けておやんなされ。等の重荷を背負てますで、路傍のぶは／＼雪に踏込んぢやあ、足を抜いて取ることを為得ませぬ。いや、また雪路はこれも難儀がすよ。」

けんどもこの模様ぢやあ、もう二番手の續くこつちやあござりませぬで、峠を越すまでは逢ひますまい。また荷擔夫ばかりぢやござりませぬ。多日往來は途絶えませうか。はい／＼。嶮しいの何のツて、こりや木の芽峠、栃の木峠などといふ、命がけの奴と多分には違ひませぬ。北國から上洛へ出ようといふには冬の關所でござります。

地體平生はこれでも道幅が一間の餘もありますわ。谷底の樹の下では鶯と時鳥が一時に鳴いて居て、夏なんざ結構な處でござがね、もそりや來た雪、といふが最後此通、それ見上げるとおつかぶさるやうな巔邊から何千丈といふ谷底まで、瀧が落つるやうな一なだれの雪で、樹も山も何もあつたもんぢやござりませぬ。これで、先生、此人方等は樹の梢をかう

やつて歩行あいて居ゐるのでござりますわ。大でかい雪ゆきのかたまりへぐる／＼巻まきに絲いとをつけたやうな細ほそい道みちぢや、宛然まるでつなわたり綱渡なわたりといふもんでがす。

こりやまあ餘程よつほどしたつばら下腹あちつを落着おちつけませぬと眼めがまひます。それで足あしがこそばゆくなつて天窓あたまがふら／＼すりや、一本橋ほんばしを踏外ふみはずすわけで、ころ／＼。は／＼は／＼、其それがね、馴なれでござす。此處こゝへまた馬うまを引張ひっぱつて来こようといふ恐おそろしい人間にんげんがござりますぢや。え、落おち、落おちちますとも、落おちちますとも、よく横倒よこたふれに馬うまがなだれます。ありうちのことと、これでないともまた狼えて物が餌食えじきにありつかれませぬで困こまるでがすて。

は、はい、何なに、何なに、狼おほかみ、狼物えてものかね。出でます、出でますとも。何なに、恐こはいの恐こはかねえのたつて、そりや先様さきさまより此親仁このおやぢが空腹すきばひぢや。いやまた其時そのときのまづいものなし、何なんでござれ取とつて喰くひたいといふ、こんな厄介やくかいな人間にん間げんにか／＼つちやあ、彼奴あいつがまた利口りかうでな、傍そばあたりへ寄付よりつくものぢやござりませぬ。

何でも、物ものが恐おそろしいのは、腹はらの張はつた時ときと金子かねのある時ときに限りかぎまするわ。あ／＼、我おらあ懐中ふところに満まんとあるが、取とられようか、盗とられようかと、はつ／＼思おもつ

てると、此奴が手もなくやられますかい。初手から
また 盗られまい／＼と怯氣々々した日には指一本
さはられぬ前、ハヤ盗られても同一で、どつち道
無い奴が暢氣でござがね。また懐に持つて居ても、
えゝ！ 盗つてやらう、持つてさうな奴が見えたら
掴んでやらうと、盗眼で歩行て見ますか、此奴盗ら
れつこなしの一番、大丈夫なもので、つまり盗賊の
用心には手前でさきに盗賊になるのでござ。はゝゝゝ
はゝ、いやよく饞舌りますわ、これでまた一杯とあ
ふつて御覽じまし、雪の中へ寝轉んで、寝言さへい
ひかねませぬ。はゝゝゝはゝ、さあまづ峠へ着きま
した。一時ゆつくらと休まつせえまし。おい、婆さ
まや。と先へ立つた。籐編の向膝に沓懸草鞋、
足袋なしの跣足で、大きな足をやつとこさと上げて、
のさりと入る。頬被をして、笠は着ないで、石田縞
の綿入の上へ手輕う豊島莫座を引懸けた、しやんと
した造つけのやうな武骨な親仁。片手を懐つたまゝ
片手にはいま火の消えた提灯をぶらりと提げて居る
が、其まゝ、ナアござれナア、なんどゝ鼻唄でもや
りかねさうにない、達者もので、これは武生あたり
から朝疾く出る道案内。

急に雪が来て一晩に積つた時、早立の客は地の理
を知らないのに、粉雪が風に吹きまはされて、小
な池の上も、用水も、小川の堰も、田の上も、唯凸
凹のない雪の原になるので、づばと穴を踏みあけて
水に落ツこちなどしないやう、宿から心着けて先立
たせる。此峠まで先達となり、萬夫を越す處まで見
送つて、ぶらりと歸ることになつて居る。

「おゝ、御苦勞様ぢや、さあ／＼、ずっと寄りつてあたらつしやれ。」

「はい／＼。」といつて道案内の親仁は、自分先づ腰を掛けた、が振り向いた。

「さあ、先生、休まつせえまし、婆さん、どつさりと焚いてあげてくれ。」と微笑んでいふもてなしぶり。無言ですつと入つたのは中脊の洋服姿、ゲートルを堅く占めて靴を穿いた、外套を着て深と帽を被つた、眞黒な緊つた扮装、身輕に結束をした旅客である。

雪だらけのまゝ親仁の向うへ、婆さんの隣へ、腰掛を跨いで入つて、いま焚着けた炎さきへ手袋のまゝ両手を翳した。其歩を移すのも、腰を掛けたのも、爐の火に手をば翳したのも、心あつてするのではないやうな、無心の状で、別に深く何等か思ふ處があるらしい。其一舉動はすべて此旅客に取つては、ほんの、纒に、輕少な、些細なことであるらしい。旅客は深い帽子の中から外の方を眺めながら、無雑作

に、

「茶をおくれ。」といった。

一體、飲を求むるとか、暖を要するとかいふ、手足や口についてのこと、たとへば主義意見などに必要のない、即ち此親仁や、婆さんに對してものをいふ其口數は極めて少ない、言は簡單なものであるが、しかし注意せぬ、無雜作な、其舉動たるや、頗る輕快なものであつた。

「はい／＼。」といつて、婆さんは茶碗を取ると、案内者の親仁は手近にあつた茶柄杓を取つて、

「こゝへ出さつしやい、汲んであげよう。」

と茶碗を婆さんから取つて、親仁はまめ／＼しく茶釜の蓋を外して、持直して突込む茶柄杓が釜の底へトンとあたつて、金の蓋が力チリと鳴つた、櫛は焚え立つて、其時ばう／＼と音がする旅客の黒い外套のやゝ濡色を帯びたのが火のあかりで、赤らんだ。

婆さんは右瞻左瞻ながら、

「何處までござらつしやるの。」

打つけには威儀ある人に失禮とでも思つたか、か

ういつて婆さんは親仁を見る。

「敦賀までお急ぎぢや。」

「やれ、お年少ながお一人で、それは御大儀でござらつしやるの。」

旅客は會釋をしたのであらう、ちよいとうつむいた。婆さんはほく／＼した顔色で、

「矢張御修行に行かつしやるのか。」

親仁は傍から引取つて、

「いにや、ずつとお役人、それ、婆さん、お前も聞いてるぢやらう。今度敦賀から福井へかゝる鐵道の、アノお係で。えゝ、武生のお宿で何とやらいひましたわ。其、何、技師とやら、なう先生。」

「むゝ、出懸けような。」といった。片手で茶代を置くと、其まゝ肅として立つた。兩手を懐へ入れたが衝と腰掛を跨いで出る。

婆さんは口早に、

「まあ、旦那様。」

「さあ、お急ぎが宜からうて、そんなら行かしやりますか。」

「御苦勞。」

「はい／＼。」

と勞ねぎらはれたのを喜よろこぶ状さまで、いそ／＼あとへついで出る。こゝまでは先導せんどうで、親仁おやぢの役目やくめは濟すんだのだけれど、あとは實體じつていものゝ見送みおくるつもり。

此時このとき、また一ひとしきりサラ／＼と降出ふりだして、ぱつくり開いて居た高い處ところの隧道トンネルの口くちは、紛々ふんぶんたる雪片せつぺんのなかに明滅めいめつする。

前途ゆくてをキツと仰あふいで見て、技師ぎしはまつすぐに立つた。親仁おやぢはまた振返ふりかへつていま来た、かすがのゝ麓ふもとの方かた、技師ぎしとは反對はんたいに其足許そのあしもとを瞰下みおろした。

峠たつげから谷たにの眞底まそこまで、一ひとかたまりの雪ゆきになつて、唯ただこの二人ふたりは凄まじい一個絶大なる雪ゆきまるげの上に立たつてるので、山やまの鼻はな、山やまの懐ふところに、斷續だんぞくして一條絲ひとすぢいとのやうに通かよつて居る、雪ゆきの細道ほそみちの遙はるかに眼めの届とどく谷間たにあひあたりが、此時このとき吹雪ふぶきたつて颯さつと粉雪こゆきを吹ふき上げたが、宛然さながら鐵瓶てつびんの口くちから湯氣ゆげが立たつたやうに、處々ところ／＼ぶす／＼となだらかな雪ゆきの面めんへ湧わきあがる。

峠一座はソヨとの風も吹かず、ぼた／＼と大きな雪が降りしきる、森とした耳許に、ケケケツケーと鶏が鳴いたが、山から山、山から山へ響き渡った。

親仁は更に麓を見た、寸人豆馬三四人、中に挟んだ黒いものは、一挺の駕籠であるが、いま其吹雪を潜つて出た。

「隧道は？」と不意に聞いた、むかうむきの技師の聲に、親仁は慌しく腰を屈めて、

「この前途でござります。」

「何うなさりました先生、先生、何うしなされたのでござります。」

背後に從へた親仁に怪まれながら、技師は、隧道の口へ立停つて、一步も進みさうにない。彼の手をふたとも衣兜にいれたまゝ、肩を張つて、眞何に隧道に面し、冷い、暗い、湿ばい、山腹を穿つた、煉瓦疊の巨大な洞穴の中を透しながら、

「何時造つた、この萬夫はいつ出來たか知らないか。」と見返もしないで問ふ。親仁は背後から答へていつた。

「えゝ、新道が開けました時で、七八年経ちませうか。」

「むゝ、そんなものだ。」と技師は一步退つて、仰いで、アーチ形の入口の天窗の上の處を見る。

親仁は問寄つて、

「何うさつしやりました。」

技師は疾には應じないで、また後退をしたが、半腹を穿つた隧道の頂をぢつと見て、

「此頂上までは、三百二十尺あるか。」
「ちやうど其位、といふ風説をします、よく御存
じだな。はい／＼。」と頷いた。

技師は左を瞻、右を瞻て、つか／＼とまた前へ進
んだ、穴へは片足をも入れないで頭巾の中からすか
して見る。暗闇な洞の中は、藕絲の孔といつても可
い、太上老君の照魔鏡も此裡をば照し得はしまいと
思はるゝが、知識を以て經驗を積んだ、此旅客の目
には梟の眼のやうな小さな向ひの出口まで透して歴
然と見えるのであらう。親仁も呆れ顔で立つて、も
の言ひかけないで、しばらく控へたから、技師は、
黙然として深く思ふところあるやうに身動きもしな
いで居たが、決然として、振返つて、くるりと隧道
に背を向けて、親仁と正面に顔を見合つた時、確と
した音調で、

「いかん、危険だ、／＼。」

と然ういつた。技師は吐いきをついたが、急いで
頭巾を撥ね上げてふつくりと頂へ懸ける、雪がばさ
／＼と落ちて、外套の其頭巾頭巾の萌黄の裏が翻つ
て、一揺ゆれると、右手を懐から出して横ざまに手

袋で拂つたが、熱したと見える、清らかな額は汗ばんで、細い、黒い、頭髪が柔かにかゝつて少濡れて居た。

眼の涼しい、色の白い、面長で、そして口の緊つた、好箇白面の一少年。年紀は二十三であらう。但眉宇の間に一種憂鬱の氣の溢れて居る、晴々しくない、曇りがちな、孤兒の相がある、――そんな顔備。

親仁はつく／＼と顔を見たが、やゝ、まじめになつた、これも穩かでない面色で、

「危険、何が何うしたのでござります。」うら若い技師は、やさしげな、しかし憂はしげな眉を顰めて、

「こりやいかん、親仁、此隧道が出来てから、こゝで幾人人死があつたんだ。」

「えゝ！」といったが、調子はづねな聲である。

「人が何人死んだ。」

「何が、何處で死んだのでござります。」

「此中で、此隧道が出来てから、此中で、」と、

判然はつきりいふ。親仁おやぢは小首こくびを傾かたむけながら、

「一人、」

「むゝ、」

「二人ふたり、三人さんにん、あの時ときと、それから」

「怪我けがは？」

「ちよい／＼ござりましたやうに聞きいたでござります。」「

技師ぎしは其夢そのゆめを見みるやうな眼まなで、更さらに四邊あたりを二みまはした。
が静しずに頷うなづいて、

「危あぶな、こんな中なかが通とほれるものか、歸かへらう。」

「何なに、お歸かへり、」

「通とほれやせん、歸かへる。」

「何處どこへ、」

「とも角つの、いま休やすんだ茶屋ちやまで行ゆくんだ。」

「其は?! いや、先生、お前様、何うなさりま
した。」

「危いから、」

「何が危うござりますの。」

「恐しくないか、親仁、」といひかけて、技師は
落着いたらしく微笑を含んだ。また慌しく衣兜へ手
のさきをつツこんで、

「むかし天井から石を落して人を殺したといふ宿
屋があつた。此隧道は何うしてそんな易しいものか、
天窓へ山を落すんだから、親仁、恐しいだらう。」

「あてこともない、はゝゝゝはゝ、可い年を仕つ
たものをつかめえて、お前様なぶらつしやる、はゝゝ
はゝ。」

「串戯なもんか、こんな、こんな無責任な、亂暴
な隧道があるもんか。煉瓦で埋められるなんか易い
こつた。山がずん／＼と下つて来る。足の爪先でも
入れようもんなら、取かへしの着かない横穴だ。私

も氣が着いて助かつた。あゝ、親仁、お前も命を拾つたんだ。もう忘れても通つちやあ不可、さあ、行かう。「といひ切ると、其まゝ引返す。親仁は心なしに二足三足後ざまに推出されたやうに身を開いたが、何か言はうとする其すきもなかつたので、雪の峠の一條道を、思はず向直つて元來た茶店の方へ、技師のさきに立つて知らず／＼歩行き出した。が、立淀んで、

「それぢや、先生。此隧道はまやかしものゝ、推つけ仕事があるのでござりますかの。」

「仕事、何が仕事なもんか。おツつけ仕事だつていや、ともかく仕事を知つて居て手を抜くのだけれど、それまでにもしてありはせん。まるで分らない。大川尻へ鐵の板をあてゝ一粟もないやうにせき留めて、水が乗越すまでを野原だといつて耕してゐると同一ものだ。」

「はて、さて。」

「それでも鐵の其板が一尺高ければ、一分時間水の溢れやうが遅い譯だ。いまゝで無事に通つたものがあるとするれば、夫は其一分間の間に通つたんだ。」

「先生、眞實でござりますかさ。」

技師は言鋭く、

「お前は何だ。この雪道を眼を瞑つて通るでないか、そんなことが私に出来るか。」

「はい、いや分つたでござります。なるはど七八年のことはさて置いて、ツイ此秋ぢや、白鬼女川の鐵橋を川田村から架けようといつたお役人に、この隧道をまかしましたら、先生のいはつしやる、そんな危険なものが出来ましたでござりましょ。から、あんな、もゝんがあは盲目滅法界、先生が斷つておつしやつて、御供田の方へ架けることにお計らひ下されたればこそ、然もない時には此方人等の家は皆ハヤニとやらの浮巢となつて、雨の降る毎に湖の上を泳いであるくのでござりましたわ。いやまた汝の勝手に川東の十八ヶ村が是非とも川田村の方へというて、役人と一緒に騒ぐのを、お前様が御技倆で御供田へ架けてくれさつしやつてから、毎年一度あての出水さへ今年は其氣もござりませなんだ。秘すことは知れるとやら、はい、お名前もお國も知りませぬが、誰いふとなくお前様を、貴下ぢや貴下ぢやというて分りましたから、老人どもは後から拝みますわ。其に違はござりますまい。先生、お前様のおつ

しやる通り、いかにも危険でござりましょ。なれども御存じでもござりませうが、これから敦賀へ行かつしやるに、この中を抜かせいでは何處からも通る路がござりませぬ。何分にもこの大雪で、故道はなくなりませぬ。中の河内へお廻りでは路の十里餘もござります。こりやまあ、茶店までお歸りなされてから、何となさります思召ぢや。」

黙つて聞いて居た技師は、この言下に答へた。

「三國から船にしよう。」

「其船が、さて其船が出ますやうなら、些少も憂慮はござりませぬが、二三日の此模様では、汽船が出ました處で第一危うはござりませぬかの。」

「何、暴風たつて、あの隧道を歩行くよりはましなんだ。」

「まづ此節では九分九厘まで暴れますが、さうすりや、どちら道危ないのでござります。わざ／＼海の方へお出懸けなさらずに、山をお越になつた方が、いづれお前様の御運なら、大丈夫ぢやろと思ひますがさ。」

「何、船はまだ萬一無事に渡られようかといふ頼もあるが、あの隧道は見す／＼危険だ。萬に一ツも事なしには通られやしないから。」

「えゝ、それはさうでもござりませうが、したが先生、また萬に一ツも通られぬといふこともござりますまいに。」

「駄目だ。」と、接穂なく技師はいつた。

「こりや先生でもござりませぬ。船も萬一、隧道も萬一、いづれも、萬一なら、」

「何、私は船のことは些少も知らん。火加減も、水加減も艫楫の取りやうも知つちやあ居らん。人まかせに船長を頼むのだから、たとひ大しけに逢はうとも、また何のやうな腕があつて、乗越さないものでもない。だから萬一とい、ふのだけれど、隧道のことは私がよく知つてる。船頭だつてさうだ。止むを得ない場合には、萬一を頼んでしけを見込みながら帆も張らうが、誰が穴のあいた船に乗つて出るもんか。穴處でないよ、あの隧道の上に山のあるのは、船に底がないのと同じだ。」

「はい／＼。」とばかりで親仁は口をつぐんで言はなくなつた。黙つて、一しきり紛々として身體に重荷の掛るやうな眞白な中を潜つて、再び土間の見える、爐の見える、眞赤な唐がらしの懸つた、煤けた壁の、店前へ出た。

茶店の趣は一變して、極めて賑しいものとなつて居る。鶏も驚いたらう。入口の土間には一挺駕籠が早き据ゑてあつて、駕籠舁か四人、土間の片隅に入亂れて、焚火をしながら、何か聲高に話し合つて、食事をして居る。別に三人、いづれも防寒具に結束

した草鞋がけの旅扮装で、件の腰掛に懸けて休んで居たが、いま親仁を前にして引返した技師が店先へ立つと、此人数で、前に坐つて居心の知れた腰掛を奪はれたのみならず、駕籠の人足やら、旅客やら、いづれも屈竟な男が都合七人で、土間一杯になつた上、駕籠で入口を塞いであるので、小さな婆さんなんざ、誰の袖の下になつてるか一寸は分らない、急變した意外の光景に、入りかけて、技師は猶豫つて居る。

これを見て、さきに技師が坐つた座に、大の字なりに足を擴げて、火にあたつて居た男が、少し身をずらして、座を譲つて、

「さあ、ずつとこれへ、あなた、御遠慮には及びません。」

恚ういつたのは三人の旅客のなかで、一番年を取つて居る。他の二人が引絡つた毛布の下は、前垂がけの角帯だけれど、此男ばかりは同一縞毛布を上へかけて、身には洋服を着して居た。天窓はすこ禿で、色の黒い、眼の細い、丸顔で、あまり品のよろしく

ない、四十ばかりの男である。

「番頭さん、大良まで何里だね。」と傍に居るのが此折に聞いたので、

「ざつと三里ぢや。」と答へながら、彼番頭さんの洋服を着たのは、また此方を見て、

「御遠慮には及びませぬ、さあ、まづ、」

「技師は無言で立って居る。」

案内者の親仁は振返つて、

「先生、」

「お前、ともかく酒でも飲め。」と言ひすてゝ、
ずつと入つた。

洋服の番頭は、いま隧道から来た技師を見ると、途中で引返したものは思はない。自分達が行かうとする、敦賀、大良あたりから山越で此處に着いたものと思つたらしい。

よこに、腰掛の上に置いてある、高帽子と、目金と、手拭とを一掴にして、傍へ取り去つて技師を請じて、

「何んな様子ですな、路はいかゞなことで。」と先づ聞いた。

技師は唯簡單に、

「危険です。」といつたばかり、顔を背けて、指を折つて、何か算へながら、一向取合ひさうにもない。

番頭は熱心で、

「へい、何うにかなつてをりますかな。」と腰をねぢつて額をさし寄せたが、技師はもの案じ顔で、冷かであるので、接穂がないから、其まゝ向うを見て、鼻を仰向け、あんと口をあいて、間の離れてる

案内の親仁を呼び懸け、やゝ高慢な調子で、
「何うぢや、親仁、何んな鹽梅ぢやな。」

親仁は駕籠舁とさしむかひで、腰をかゞめて、店先に掛け、向脛を踏みのばして、片手を炎尖にかざし、少しく反つた形で大きな茶碗を嘗めながら黙つて居る。

番頭は話聲が届かない故で、返事をしないのも思つたか、眉根を皺めて、目金を鼻ツさきへのせて、額で親仁を見やりながら、

「おい、何うぢや、うむ親仁。」

「其處な先生がいはつしやる通りよ。何だ、茶だ、べらぼうづらめ、先生が下された御酒だぞ。」

と駕籠舁へ語を移して斯ういつた。親仁は見向きしないで、ふつと天井へ呼吸をつく、唇がうるほつて、ハヤ酔が出て少し赧ら顔で居る。

殊更に隣人を動かさないで、番頭の威行はれず、何か風向が悪いので、兩人二ツの口へ八文字に煙管をくはへて、同一の煙草入に左右から互に手を突込

み、同時に煙草を捻つて居た。手代風の壮者の一人は、ボンと、煙管をはたいて、

「番頭さん、もう出懸けちや何うです。」

「待て。」といつて番頭、此度は婆を呼んだ。

「何うぢやな、婆さん、些少あ上りの客があつたかな。」

「えい、些少もござりませぬ。」

「何、些少もないか。」

「はい、今しがたの、昨夜内に泊まらしやつた按摩さんが一人發ちましたよ。」

「按摩が、ほゝう、此路にな。いや盲人が道中すりや頼もしい。さしたることもあるまいて。」と技師を尻目にかけて手代を見て、

「なあ、多計どん。」

「番頭さん、恐しくお弱んなすつたやうだね。」

「何弱りやせぬが役目が大事ぢや、ちよいとでも、にったら御新姐様のお身の上ぢや、氣を着けねばなりませんわ。おい／＼若い衆さん、それではそろ／＼出懸けるので、何ぢや、此さきの隧道は路が一町もあらう、まるで眞暗ぢやで、また御氣分に障ると

悪い。そのの、用意をした松明をつけてください、
景氣よく乗込むぢや。」

言下に、駕籠舁は一束にして背負て来た松明を抜
いて取つて、手にノ、焚火の中へ突込んだ。

颯と一陣山嵐が来て、押伏せるやうになつた炎が
ニと宙に分れて、三個火が點れたが、あふりをくれ
て、持直して、

「さあ、よし、」

「お出懸けなさいまし。」　いま一人の若手代は、
腰掛から立つて駕籠の前にしゃがんで、膝に手をか
まへて片手は土につき、

「御新姐様。」

駕籠には、ひっそりとして聲がしない。

合棒はあとさきになり、息杖を取つてハヤ肩を入れるし、松明はいま一人の手代が一つ取つて前に立つた。あとの二つは手代の人足が捧げて持つて、垂の右左に引添うた。あはや昇上げようとする、ト手代は更に頭を下げて、

「御新姐様。」 あどけない、少し口籠つた、優しい聲で、駕籠の中から、

「あゝ、多計か。」

「はい、それではお供いたします。」

「待つて下さい、あの多計や。」

「へい、もつとお休み遊ばしますか。」

「何、今何とか言ひましたね。」

「何でございますか。」と手代は憂慮はしげにいつた。

いま既に昇上げようとした駕籠昇も、これを聞いて別に制せられは為ないながら、猶豫つて居る。

「あの、盲目が何うしました。」

「へい。」とばかりで、手代はギツクリ思ひあたつたらしい。振返つて彼の洋服の番頭と顔を見合せ

だが、雙方目くばせをして何にも言はない。また駕籠の中で、
「善助に然ういつて下さい、私は少し見合せたいから、」と弱々しい音調である。

「番頭さん。」といつて、手代はまた彼洋服を着たのを見返る。こゝへといふ眼つきをするので、ソツと傍へ行くと、低聾になつて、

「悪いことを聞かせたぜ、なあ。御新姐様に盲人と来た日にや、それ知つての通りの禁物よ。お前は知るまいが、昨夜だつて左様さ。ちやうどお休にならうといふ處へ、お前、旅宿のこつたからお療治は、といつて盲目が来たらう。何もあの、御新姐様に執心をかけて取着きさうな、ソレ新町の盲目のあれとは似もつかない、たゞの旅屋を稼ぐ按摩だつたのに、一眼御覽なされると眞蒼よ。今朝も其響で御氣分が悪いのだ。飛んだことを聞かしたものだ。私等大の男が何人附添つてゝも、いま此さきへ盲人がたつたといつちやあ到底急におたちにはなるまいて、こりやお見合せぢやの。何てつたつてお聞入になるものぢやあない。お心の休まるまでな、ともかくお待ちせ

申す（まをす）としよう。嫌（きらひ）な蝶々（てふ／＼）に取（とり）着（つ）かれて、死（し）んだ人（ひと）さへあるといふから、御新（ごしんぞさま）姐様（ぢさま）の盲（めくら）人（ひと）ぎらひは、こりや私（わたし）等（ら）には度（ど）合（あ）ひの分（わか）らない位（ゑん）なものでせう。」

手代（てだい）は頻（しきり）に頷（うなづ）いて、

「眞實（まったく）でさ、ぢや然（さ）うしよう。」

立直（たちなほ）つて、

「御新（ごしんぞさま）姐様（ぢさま）。」

「可（こ）い（い）かい。」

「へい、お見（み）合（あ）せが宜（よろ）しからうと、へい、番頭（ばんとう）さんも然（さ）う申（まを）します。」

「あ、面倒（めんたう）だつたね。」

駕籠（かご）の中（なか）は静（しづか）になつた。松明（たいまつ）を持（も）つた三人（にん）は其意（そのい）を諒（りやう）して一齊（せい）にふるツて消（け）した。土間（どま）へ叩（た）きつけると火花（ひばな）が散（ち）つて、ばつと雪（ゆき）の中（なか）へ交（まじ）つて消（き）えると、鼠色（ねずみいろ）の雪空（ゆきぞら）がかぶつて茶店（ちやみせ）がまた薄暗（うすくら）くなる。爐（ろ）の煙（けむり）は白（しろ）くなつてむく／＼といぶつて居（ゐ）る。駕籠（かご）昇（かき）はついたものが離（はな）れたやうに先（あ）後（さき）に分（わか）れて片隅（かたすみ）へ寄（よ）つた。

「御新（ごしんぞさま）姐様（ぢさま）、しばらくお見（み）合（あ）せになりますなら、

まあ、ともかく、些と外へお出ましになつておあたりなさいませんか、冷えますと、またお胸が痛みませう。山家でございます、むさくるしうございますが、一一向、お心置きはございませんで、へい。」

「ぢや、些とお邪魔になりませう。」

垂を上げると肩掛の端が翻つて袖が出た。急いで揃へたる駒下駄に、そと足を下すと長襦袢の端が土間にこぼれて、ニの厚い襲着の裾がしつとりと爪先に乗ると、半身が顯れる。

藤色縮緬の頭巾を被つた、高髻の形のいい、黒目
 勝の目の涼い、丈は高い方のすらつとした、見るか
 ら美しい、氣高い、人品なのが、サラ／＼といふ衣
 ずれの音で立ち露れると、少しうつむいて頤で搔合
 せた肩掛の襟をおさへながら靜に二三歩、歩を運ん
 だ。

手代は件の三角形に並ばつた腰掛をはづして、急
 いで一方の口をあけて、

「何うぞこれへ、何うぞ。」といつて中腰になる。
 無言でそろ／＼と來てなかへ入ると、またびつたり
 と腰掛を寄せた。端の方へ歩み寄つて、と見ると向
 の腰掛には技師がさつきから手帳のやうなものを繰
 廣げて、うつむいて見て居たので、

「御免遊ばしませ。」と慇懃に會釋をして腰をか
 ける。同時に善助は高帽子と其手拭を引攪つて座を
 立つた。手代も傍へ退かうとする。

「可いよ、構ひませんから、其處に。」

「いゝえ、何ういたしまして。」

對座は恐れありといふ状で、慌しく席を駕籠昇の方の焚火へ移す。三角形の腰掛には唯むかひあつて二人となつた。技師はつく／＼と見て居た手帳をばつたり疊んで、下に置いて、少し胸を張つて身體をのびたが、また前へ屈んで手を其額に加へた。

「先生、先生様。」と案内者の親仁は、遙に手をついて乗出して呼び懸けた。が、技師は黙つて居た。「もし、先生、えゝ、それでは何うなさります、何うしてもあの隧道を通らつしやりませぬと極りましたかの。」

技師は沈黙して居る。

「先生、先生。」と、また呼んだ。

「む、待て。」といった技師は、手帳を取つて、ぐつと衣兜へ突込むと膝に手を置いた。

「少御免なさいませよ。」と藤色の頭巾は優しく然ういつて、櫓に兩手をさしの、べるトタンに肩をすべに肩掛がさらりと落ちて腰掛の上へ疊まる。

「さあ、」とばかり、はづしてある手袋を取つて片手に摘む、無頓着な技師の顔を頭巾のなかゝら、

御新姐はぢつと見る。

技師はまたうつむいた。

「先生。」

聞きつけない。

「先生。」といつて、親仁は一膝摺り出したが、何とも言はないから、また引込んで、今度は外の方を見て空模様を窺つて居る。

技師は其まゝうつむいて居た。藤色の頭巾は襲着の羽織姿で、すつと立つて、腰掛の一方から出ようとす。

手代は見ると心着けて、

「お手水ですか。」

黙つて、頭を振りながら、まはつて、技師の背後へ行つて、氣の着かないのを傾き見ながら、ちつともためらはないで、手を其うなじへソツと懸けて、含んだこゑで、

「何うしたの？」

技師は驚いて顔をあげた。

「三さん。」

屹と眼を見合つた。

「三さん。」

技師は色をかへた。

「分りませんか。」

「

私。」

「

「信乃ですわ。」と云つた時、頭巾を取つて、氣

高い顔で微笑んで、

「ね。」

技師は顔を背けてしまった。

「よそ／＼しい、何でございます。」と投げやるうにいひすてゝ、信乃といつたのは、つか／＼と元の座に復つて、肩掛を揺り上げながら、ちよいと肩を縮めて、

「寒いこと。」

四邊をニして、はつとしたやうす。駕籠舁が四人、案内者と婆さんと、殊に供の番頭手代が皆これを見て居たのである。技師は何とも云はないで、爐に燃料を添へて、鐵火箸をぐつと入れて灰をすかすと、白い煙が續け様に二ツ三ツちぎれたやうに飛んで、炎がぱつとあがつて、皂莢茨の燃え込ものが、はじいて、ばち／＼と鳴つた。灰はたつて、降りかゝつたが、信乃は燃え立つた炎先に翳してた手を引込まして、肩掛にかくして肩をしめて、肱の處で胸を抱いた、頭を襟に埋めて居る。

技師は眉を顰めながら、手巾を掴み出して、何う

したのか知ら、仰いで額の汗を拭つた。

善助は來り小腰を屈め、

「御新姐様、何うなされますな。」

其まゝ、頤を襟に埋めたまゝ、見向もしないで、

「待たうよ。」

「何時までお待ちなさいますな。」

「盲人はお前、足が遅からうね。」

「へい、路で追着かないやうに隔りますまで待ち

ましては、かやうな日脚でございますなり、暗くな

りませうも知れません。」

「仕方がないから、さうしたら此處で泊りませう。

貴下、」といつて技師を見る、技師は瞳を返してぢ

つと面を見合ひ、

「貴下は何方へ行らつしやいます。」

「敦賀に越すんですが、此さきの隧道が通れませ

ん。武生へ歸らうと思つてますが、もう草臥れつち

まひました。」

「通られません。え、隧道が何うかなりましたか

な。」と番頭は奪つて聞く。

「何うにもなつちやあ居ないですが、何うにか

なるだらうと仰しやるんで。」と、親仁は引取つて口を挟む。

善助は振り返つて、

「何うかなる、そりや何うしたことだな。」

「先生はお前様、あの隧道の人相を覽さつしやつたんで、いまにも壊れさうだで、危いとおつしやるんですがす。」

「何ぢや、隧道の人相ぢや。」

「人相ぢやないがの、何でも、はい、私等が此山道のことを心得て、眼を瞑つてなり、てく／＼と歩行くががす。其とおんなじに、あの先生は隧道のこを心得て在らつしやるで、危い、こんな處が通られるか。技師ぢや、鐵道の役人ぢや。其道のものがあの隧道を通るのは、船頭がしけを見かけて、底のない船に乗つての、佐渡が島へ渡るのと違はんと恁うおつしやるので。」

番頭は、ひよんな顔で、

「や、大したことになるて來たなあ。」

「私はハイさほどにもあるまいと思ふのががす。」

けれどもまた。」

「いや、此方人はそんなことは何でもないが、盲人が大難ぢやおつしやるわい。ま、ま、何しろお心の安まるまで、日が暮れたら泊るとして、落着いて居るが可からう。なあ、多計どん、千どん。」

「談の材料でさ。」

「何も可うございませう。」と、手代二人は然う云つた。

ニ黙してさしむかひ、身動もしないで居る二人が中には、また炎が消えて、皂莢の蔓の燃えたのが、ひとすぢまつか一條眞赤になつて居たが、ぼろ／＼と細く折れた。

其時、山が鳴つて、雪が斜に降つて來た。

「それでは先生、お前様もこゝで泊るとさつしや
りまし。こゝがものゝ峠でがす。また何として隧道
を見直さしやつて、お考が違うてから、通る氣にな
らつしやるまいものでもないが、あとへ戻らつしや
つては、又のぼりでござりますで、ゆつくりお考へ
なされましたが可うござりませう。」

技師は頷いた。

「御新姐様、あなたもまあゆつくりお休み遊ばし
たが可うございます。何の道半日か一晚のことでご
ざいますから。」

番頭の言に、信乃は固より異議はない。駕籠舁も
尻を据ゑる。皆が呼吸をついてゆつくりする。

案内の親仁は立懸つて、

「ぢやあの、婆さん、何の道不自由なは御承知ぢ
やで、氣まゝに泊めてあげさつせえ。」

多人数の旅客に爐縁を占められて、腰掛にも框に

も居たゝまらず、しかし珍しい、きれいな女客と、うつくしい、うらわかい技師とに見惚れたので、納戸にも引込まず、店口に踏んで、あの緋緘の鎧をかけた、煤けた柱によつかゝつてつくねんと、先刻から、あちこちのいひ分を、聞いて黙つて居た婆さんは、いま親仁が言を聞くと、居直つて前へ出た。からびた聲で、

「まあ、お前様方は何をいはつしやる。此處さ、お前方、何處だと思つてござらつしやる。かすがの、峠でござらあ。冬空に此處へござつて、草臥れたの、ゆつくりぢやの、泊らうのと、まあ、何たるこつたの。其上に見さつしやい、此雪ぢや。休まうの、泊らうかといふ段かいの、あてこともないことを。このまた親仁どのが、氣樂でござらあ。」

内の納戸を行つたり、來たりするやうに、通馴れて居る山稼の男でさへが、一足づゝ氣をつけて、澁ッ面で空を見て歩きまするわ。一時おくれると路が埋もれてしまひますが、こゝで降籠められたら雪籠にあひますで、これが武生に居りや、福井へ歸ることが出來ますなり、さきの大良まで行つてござれ

ば、後は海邊ぢやで吹雪いてから敦賀へ何うなりと
して參られます。此の峠で閉ぢられては、さきは
十二社まで二里半の山中なり、あとは武生まで三里
十町の坂道なり、あとへもさきへも行かれませぬで、
來年の三月彼岸前にならひでは、私がこの小屋から
里へ生れて出ることがなりません。一昨日から今
朝まで二晩、昨日來さつしやつたなら半日と一晩、
昨夜着かつしやつたら今朝までよ、それだけなら泊
めましたのでござるけれど、見さつしやれ、この降
ぢや。これでは半日も覺束ない。さきほどからお前
様がた、平氣で茶を參つたり、煙草を吹かしたりし
てござらつしやる。やれも、心ない人達ぢや、此
年まで生きてゝさへ覺えて三度目の大雪に、何とし
たものであらうと、私は氣が氣ぢやござりませなん
だが、お懐しい、また多日人様にお目にかゝられま
い、雁を抱いて寝ることが、しばらくでも恙うやつ
て賑かにして居りたさに、つい申さずにをりました
が、お泊りなどゝは思ひも寄りませぬ。一時もはや
く立たつしやれ。駕籠の衆も素人ぢやの、第一親仁
どのが何うしたものでぢや。」

と、すつきりと云はれて、口籠つた親仁は慚悔の

體で、

「いや。」

「いやぢやござりませぬ。さ、ちやつと、何方へなり早くたゞつしやりまし。あれ／＼、日中に鶏が鳴きまする、お名残惜い、なんまみだ／＼。」と口中に誦して、婆は愁然と眼を瞑つて、黙々として冷灰のやうになつた。

「親仁、」と、駕籠舁どもは一齊にいって、きづかはしげに親仁を見た。親仁は穩ならぬ顔色で、

「違えねえ、まつたくだ。」

「さあ、来た、はじめつた／＼。」と手代は忙しさうに身を起す。善助は慌てた状で、つか／＼と寄つた。

「御新姐様、親御が御大病でおいで遊ばす、もとへお引返しなさりますわけにはまゐりますまいが。」

「あゝ。」

「それだと早くたちませんでは。」

信乃は得堪へない色で深く頭を垂れた。技師は仰いで胸中の苦を忍んで居る。

皆黙つた。

信乃は顔をあげて、覗くやうに技師を瞻つて、

「あなたはお急ぎではないの。」

「私も急なんです。」

「それでは参りませう。」と、信乃は意を決したやうである。

信乃の先刻の様子といふものが、たゞ盲人がさきへ通つたといふから、いやなもの道で一所にはなりたくない、とばかり好嫌をする、單にわがまゝでいつたやうな、さやうな軽々しいのではなかつた。

更に技師が隧道を危ぶんだのは、其安否を疑ふといふやうなことではない。一步でも踏込めば自分の生命を奪はれるのが何かの因縁にでもなつて居るかのやうに、それはどまでに其危険を信じて居るので、いまこれを諾するとすれば、死を決するのである。否、たゞ死を決するといふ容易いのでない。決心は最後の策で、何等か萬一といふはかないながらも望はあるが、底の無い船であらしの中を佐渡が島へこぎ出すのだといつた隧道を通るのは、何の事はなく、死に赴くといふものである。

それはど大事だいじなことだのに、唯たゞ一言ひとことさそはれたゝ
めに、忽たちまち其色そのいろの動うごいたのは蓋けだし怪あやしむべきことでは
ないのか。技師ぎしは顔かほの色いろをかへながら、呼吸いきぐるし
い、おもい調子てうしで、

「参まゐりませう。」と、いつて、眞蒼まっさをになつた。

「番頭さん、何うしたんです、番頭さん。」
眞先に立つた番頭は足をすくめた。多計と千、其背後に續いて、空駕籠はあとから来る。番頭は前途をすかしながら、退つて隧道の口にためらひ、
「待て、心持が何か變だわえ。多計どん、まあ、急くな、茶店を出る時はたゞあわたゞしいので、何の氣もつかなんだが、此眞暗な薄ら寒い穴へ面と向つたら些と怪しくなつたて。何ぢやるとをかしいぜ。考へて見ると、一番さき盲人でけちがついたわ、御新姐様がぢぶくり出したわ。其上にあの技師とやらが一度こゝへ來て、又あつちへ引返したのぢや。可いか。まづそれこの處が危いとして見るか、此方はあのまゝで休んで居りや何事もなしぢや、また技師もよ、一度引返したものを其まゝにして置けば、別條はなしで、まづそれまではものゝ知らせで天道様のお助けといふものぢやて。其處で、さきも此方も見合せることに極つたわ。そこへあの婆さんが故障をいひ出して、それで到頭また出かけることになつたは可いが、けたいが悪いな。御新姐様も、技師も

何か知ら考へて見るとすべて影法師が薄かつた。あなたが行けば私も参ります、あなたが行くなら御一所に参ります、と何かいやなことを知つてゞも居ながら、覺悟をしていつたやうな口ぶりぢやての。第一鷄の聲も變なり、婆のお名残惜いがいやなり、あのまたお念佛も氣にくはぬ。して見るとあの二人は何かそれ、この一ツ穴で因縁事とでもいふやうなことではあるまいかさ。無からう／＼、そんなことがあつてはならず、またありもしまいが、こりや些と同時に同一穴中は恐しい。なそれ、此方へ來てから氣のついたといふも、また定まつた天命ぢやあるまいか。多計どん、まあ／＼、ともかくもこゝで立竦とやれ、何うぢやい。」

「えゝ！ いやなことをいはあ、番頭さん、ぞく／＼するぜ。こいつあ、一足もあるけやしない。」
「待て／＼、幸ひ松明を持つてさきへ入つてるから、幽に行前が見えるわ。ずっと、あの二人が通すぎて、むかうへ抜けるまで、こりや何がなしに見合せることしよう。」

と、異様な顔色で、震へる足を踏固めて動かない

から、一筋道なり、一列七人、ずらりと黒い形で、雪のふりしきるなかに立停る。

眞先の番頭は、かゞんで、隧道の中をうかゞつて見る。眞暗の穴の中三十五間の半ばあたりでもあらう。

薄紫の肩掛の後姿が、いま一團のあかりの中へぼんやり見えた。人形だけの大きさを頭上、左右の崖は水氣を含んで黒いのに、あかりがさして、キラ／＼と光る。足許には此雪にも岩の点滴が落たまつて蒼くなつて颯と走つて居る。藤色の頭巾の色のやゝ黒ずんだのがひつたり胸にくつついて細い手で其肩を抱いた。技師は松明を一ゆり揺つて、頭高く、ツとさしかざした。其火の岩にうつる中に、眞黒な外套ですくつと立つたのが、いま松明をあげると穴の西の入口を見返つた。

薄紫の肩掛、藤色の頭巾と、黒の外套と、一つになつた姿があり／＼と見えて、松明をあげて振返つた技師の顔色は土氣色である。と見る時、わつとい

つた一列七人の男は、眞白な雪の上へ巨砲の口から
射出されたものゝやうに、哄と投出されて算を亂し
た。

山が暗くなつて、けたましい鶏の聲。

【完】